

平成 25 年 10 月 14 日午前 9 : 00、メルボルン高校を訪問しました。メルボルン高校はオーストラリアでも最も歴史のある公立高校で、これまで様々な分野で活躍する人材を多数輩出してきたオーストラリア国内屈指の名門校です。メルボルン高校に到着後、校長室に導かれて、ジェレミー・ルードウィック校長と 40 分ほど話をしました。

#### (1) ルードウィック校長との話 (要約)

「日本人は礼儀正しいことが、とても素晴らしいですね。川内さんは日本内外で毎週のように走られているようですが、本校にも 40 週連続で世界中を移動しながらフルマラソンを走った卒業生がいます。在校生の中には、クロスカントリーで活躍する選手が数名おり、現在の生徒会長はヴィクトリア州のクロスカントリー大会で優勝を勝ち取ったと記憶しています。

過去に東京五輪に 1 万メートルで出場し、銅メダルを獲得したロン・クラーク選手は本校の卒業生です。かつては、オーストラリアも日本と同様にマラソンが強い国でしたが、現在は昔と違って生活が豊かになって移動の手段が変わってしまったことでエチオピアなどのランナーに勝てなくなっていました。そのことはオーストラリアと日本は似ていますね。」

#### (2) メルボルン高校について

ルードウィック校長との話を終えたあと、日本人教師の藤野昌哉先生によりメルボルン高校を案内していただきました。高校の傍を流れるヤラ川沿いにはサウスヤラの高級住宅街・マンション群があり、高校はその中の丘の上に建立されてまさに中世の城のような外観でした。校舎内では、トレーニングジムや屋内温水プールなどの設備が完備されており、ナショナルチームやヴィクトリア州代表チームも利用することがあるそうです。

講堂にも案内されましたが、講堂には成績優秀な卒業生やスポーツで優秀な成績を残した卒業生の名前が刻まれたプレートが掲げられていました。また、歴代校長の肖像画も飾られており、歴代校長は全員メルボルン高校の卒業生だということです。日本の公立高校と違って校長の任期は長く、そうした長い任期を活かして校長は中長期的な視野を持って、様々な課題に取り組んでいると伺いました。

生徒と教職員の関係では、生徒と教職員のトイレは別々で、正面玄関から入ってすぐの左右二つの階段は生徒用 (左) と教職員用 (右) に分かれているなど、日本以上に立場の違いを明確に分けていることに驚きました。

校庭の一番目立つ場所には、スポーツで活躍した卒業生たちの銅像が何体も建てられており、正面玄関前の中央に建立してある 2 体は、東京五輪 1 万メートル銅メダリストのロン・クラーク選手の銅像で、銅像は非常にリアルで血管まで再現されていました。

メルボルン高校校歌のテーマは「Honour the Works（何事にも全力で取り組み）」で、「Works」という単語には様々な意味が込められていると伺いました。メルボルン高校の生徒は勉学以外での趣味や特技をととても大切にし、中でも音楽に関しては生徒が自ら作曲したり演奏したりするなど、教養の一部としてとても重要視しているとのことでした。全校コーラス大会はとても盛り上がるそうです。

授業中はブレザーではなく、名前入りのラグビージャージを着て授業を受けている生徒が何名かいました。藤野先生に理由を尋ねたところ、「最終学年の生徒は登校する期間が短いので、自分たちで記念に作ったオリジナルラグビージャージを着て授業を受ける特権がある」とのことで、服装からもメルボルン高校の「伝統」を感じ取ることができました。

### （3）メルボルン（シティ）について

シティには英国風の建築物が多く、19世紀に作られた石橋は現在でも使用されています。市内にはトラム（路面電車）が数多く走っており、シティ内の隅々まで様々なルートが網の目のように張り巡らされていました。メルボルンは移民の街として知られ、各民族が中華街、ギリシャ人街、イタリア人街、トルコ人街などのテリトリーを形成するなど、世界の縮図と呼ぶにふさわしい街という印象を受けました。イタリア料理店では「マンマミーア」という言葉も店員から聞くことができ、本場イタリアの雰囲気を感じました。アジア系の人でもシドニーやゴールドコーストよりも比率が高く、まさに「多文化主義（Multi-Culturalism）」の典型的な姿がそこにありました。

また、メルボルンは別名「ガーデンシティ（Garden city）」とよばれるほどシティ周辺やヤラ川沿いには大規模で美しい公園が数多くあります。その公園には定期的に清掃車がいって芝生の状態を確認しながらゴミを回収するなど、常に景観を維持しようとする光景には感銘を受けました。

土曜日早朝のビクトリアガーデン周辺のジョギングコースには、キツイ坂があるにもかかわらず、数百人以上のランナーが走っており、まるで日本の皇居のような状況だと思いました。女性や高齢のランナーも数多く走っており、そうした個人だけでなくカップルやグループでランニングを楽しむランナーも大勢いて、オーストラリアのランニングブームを改めて実感しました。

勤務先の春日部高校がこのような伝統のある高校と交流活動を行えることは本当に幸せなことだと思います。だからこそ、春高生はこうした恵まれた環境を活かして、積極的にメルボルン高校との国際交流事業に参加して、グローバルな視野を高校生のうちから養って欲しいと感じました。